

包括的環境影響評価書案概要（環境省作成）

I 米国政府から送付された包括的環境影響評価書案

1. 表題

マクマード基地周辺活動の継続と近代化のための包括的環境影響評価書案

2. 作成者

米国国立科学財団

3. 活動の場所

マクマード基地及びその周辺施設

4. 工事予定時期

2019年より15～20年

5. 環境影響評価の対象となる活動

マクマード基地は1955年に建設され、当該基地及びその周辺施設の多くは耐用年数に近づいているか超えている。このため、基地及びその周辺施設の近代化（建物や構造物の解体、建設、改修）を実施する。工事は、2019年より15～20年かけて行う予定である。

6. 環境

マクマード基地は、ロス島のハットポイント半島の南端に位置し、ロス島、マクマード海峡、マクマードドライ谷に囲まれており、その周辺には、20の南極特別保護区（ASPA）、5つの史跡記念物（HSM）等が存在する。

ロス島の南極特別保護地区（ASPA：No. 124 クローシア岬、No. 121 ロイズ岬）では、コウテイペンギン（*Aptenodytes forsteri*）、アデリーペンギン（*Pygoscelis adeliae*）等が繁殖し、マクマードドライ谷は、南極大陸で最大（15,000km²）の南極特別管理区域（ASMA）No. 2の中にあり、コケ、藻類、シアノバクテリア、線虫のコロニーなど重要な微生物群集を含む寒冷砂漠の生態系を有し、特別な地質学的特徴と鉱物も見られ、マクマード海峡を含むロス海は、南洋で最も生物学的に生産的な地域の1つで、様々な底生生物群集、海洋哺乳類、ペンギン、魚、無脊椎動物が生息している。

7. 環境影響の緩和策

現行の米国国立科学財団の手順の実施、必要に応じた緩和策やモニタリングにより、環境影響を最小化する。予期される影響は、野生動物障害、基地の景観の変化・近代化、工事区域の土砂の攪乱、建設車両や機器からの大気汚染物質の発生、建設廃棄物の管理などが挙げられる。

8. 結論

本活動が南極環境に与える影響は、軽微な又は一時的な影響を上回ると考えられる。しかしながら、本活動により、マクマード基地等においてエネルギー及び物流効率の向上等が図られ、科学的及び運営的利点が生じることを考慮すると、このレベルの影響は受け入れ可能であると考えられる。

以上